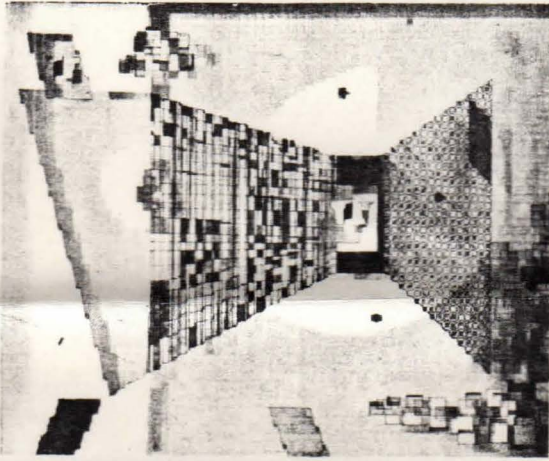
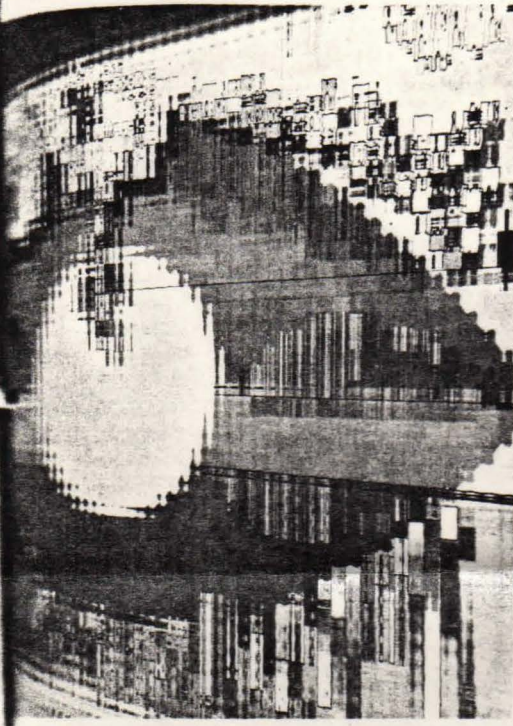


工芸-2-2 1953.8月号

VITRINE BY YAMAGUCHI KATSUHIRO

山口勝弘 “ヴィトリーヌ展”

5月1日~10日 東京神田タケミヤ画廊

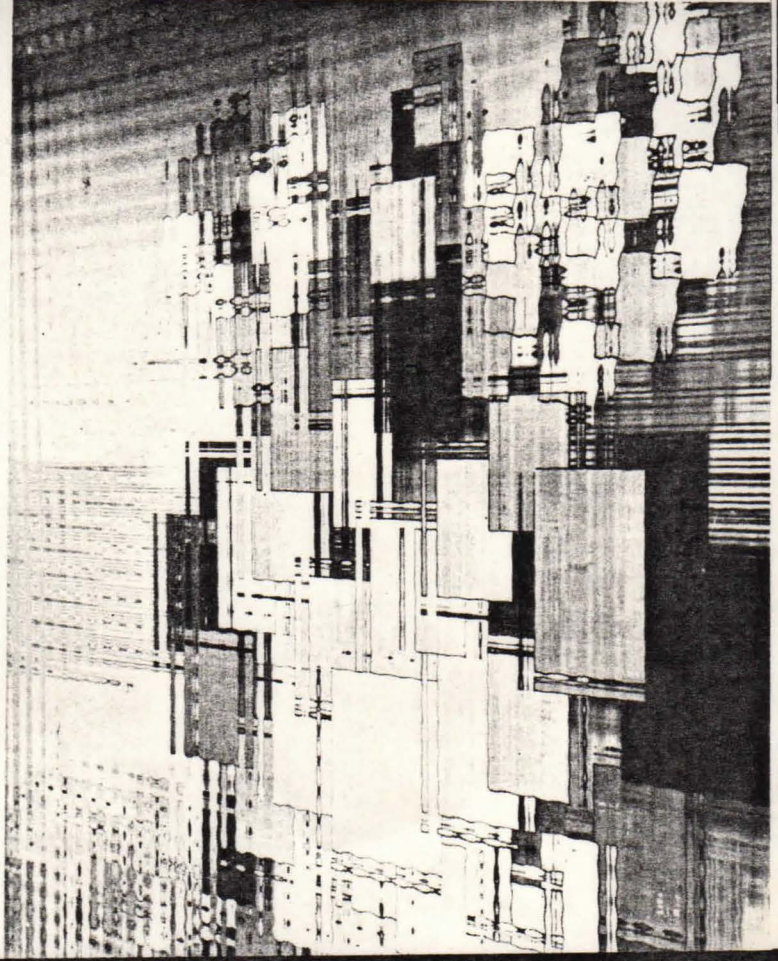
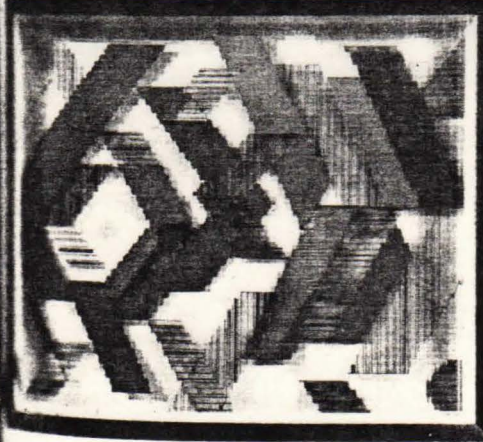


ヴィトリーヌ No. 30
空虚な眼

ヴィトリーヌ No. 25
レーダー

ヴィトリーヌ No. 28
錯乱

ヴィトリーヌ No. 33
霧の中の怪物



この作者が、ゴシック時代に生まれ合わせて、ステインド・グ
ラスの組合に属していたら、きっと異端邪法の徒として破門されて
たかもしれない。モダン・クラフトの発想法は、恐らく近代工学が
無意識として疑ってもみない素材そのものを、改めて疑ってみるこ
とから発端するようだ。ウィルカーは、ブライウッドを疑って、元
木のうす板に還元し、そこから再出発することによって、あ
んなにクラフトを生んだし、サルパネヴァのガラス器も、やはりそ
うだ。山口のヴィトリーヌも、そういう20世紀の、新しいクラフト
の道に立つ。この点において、まず近代工学を前提してかかる工業
クラフトとは、本質的に異ったものを持っている。人は物の形を、
見ることに喜びを持つものだが、ヴィトリーヌは、そういう意
義は、複製の美しさである。しかし、手法的に見るなら、画面の全
体をそのしげに動くことは、やや騒がしい感じを興え、この作者
の作品のエネルギーに耳を傾けようとする時、あるいは多少の妬げと
して、ものではあるまいか。

(勝見)